様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年６月７日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2005～2008
課題番号：17520287
研究課題名（和文）　文法の地域社会内変異と通時的変化に関する統合的研究

研究課題名（英文）　An unificatory study of social variation and diachronic change in grammar

研究代表者
山部　順治（YAMABE JUNJI）
ノートルダム清心女子大学・文学部・准教授

研究成果の概要：
研究対象とした言語は、オリヤ語（インド東部で話される印欧語）、ディヴェヒ語（モルディヴで話される印欧語）と日本語（岡山市を中心とした西日本の諸方言）である。これら言語における構文という文法単位について、同系統の言語間、同一言語の地域方言間、同一地域内の話者間に存在する変異の状況を解明した。また、現在の変異状況を現出せしめている、通時的変化の過程についても、その様子を描き出し、起こった理由を説明した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００５年度	1,100,000	0	1,100,000
２００６年度	600,000	0	600,000
２００７年度	600,000	180,000	780,000
２００８年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総　計	3,000,000	390,000	3,390,000

研究分野：言語学
科研費の分科・細目：人文学・言語学
キーワード：オリヤ語、インド・オリッサ州 、ディヴェヒ語（ディベヒ語）、モルディヴ（モルジブ）、歴史言語学、方言学、社会言語学、類型論

１．研究開始当初の背景

本研究は、２つの理論的関心を持つ。第１は、「共時的変異や通時的変化」という観点。この観点は、古典的なものであるとともに、

近年は言語の構造や使用についての従前の過度な単純化・理想化に対する反省から再評価され、方法論上の革新を伴い目覚しい新知見を生み出し始めている。第２は、主観性（表現主体が表現内容へ関与すること・しかた）という題材。この題材もまた、古典的なものであるとともに、近に、認知的指向を持った意味論の一連の思潮のなかで研究が進展し続けている。

２．研究の目的

本研究では、構文という文法単位を取り上げ、それについて次の点を解明すべく、資料を収集・整理する。(i) 同系の言語間、同一言語の地域方言間、同一地域内の話者間にみられる変異の状況。(ii) 現在における変異状況を現出せしめている通時的変化の動態。

得られた資料を足掛かりに、理論的な側面にかんして考察する。言語構造の多様性と普遍性、言語構造の通時的な変化と維持について、知見をもたらす。

資料収集の実践をとおして、その手法の改良・開拓に貢献する。言語学や語学教育の専門的知識のない情報提供者が提供してくれる情報から、より詳細にわたる・より精度の高い資料を獲得できるようにする。また、インターネット上のテキストなど、従来は資料源としては非正統的と見なされてきた素材から資料を収集する方法を探る。

３．研究の方法

研究対象の言語として、主に、日本語（岡山市を中心に西日本の諸方言）、オリヤ語（インド東部で話される印欧語）を取り上げた。最終年度（2008 年度）は、ディヴェヒ語（モルディヴで話される印欧語）を加えた。

研究の重点は、調査を中心とした記述的作業（下記の項目(1)~(3)）に重点を置いた。各言語について調査方法が異なる理由は、主に、研究代表者の研究環境に即応したためである。

(1) オリヤ語（インド東部で話される印欧語）の資料収集・整理。インド・オリッサ州にて、2005 年 12 年～2006 年 1 月、2006 年 12 月～2007 年 1 月、2008 年 2 月～3 月のそれぞれ約 1 ヶ月の期間、毎日 4～8 時間ずつ 2 人の話者と面接を持った。現地調査を補うべく、日本国内において、インターネット・サイト上のテキストや、現地入手の出版物から実例を採取した。

(2) 日本語の資料収集・整理。2005～2008 年の通年行った。岡山方言について、各年度、千名弱の話者を対象にアンケート調査を行ない、回答を統計的に整理した。また、対象地域を広く取って、インターネット・サイト上などのテキストから実例を採取した。

(3) ディヴェヒ語の資料収集。2009 年 3～4 月に、モルディヴ共和国、マーレ市において、ディヴェヒ語の文法調査を行った。研究代表者（山部）が 1997 年に同地で実施した調査を再開したものである。当時と同じ情報提供者 2 名と 9 日間面接を持ち、文法の基本項目を調査した。

(4) 理論的考察。上記の項目(1)~(3)の記述的作業によって明らかになった諸現象について、理論的な説明を与えるべく、動機付けとして働いた・働いている諸要因を推定した。

また、各言語の類型的性格を浮きぼりにすべく、各言語を（既存の研究文献をとおして様子が伺える）他言語と対照した。とくに、日本語については方言間の比較、また、オリヤ語とディヴェヒ語については同系言語（南アジアの印欧語）との比較に力点を置いた。

４．研究成果

(1) オリヤ語

オリヤの調査によって、オリヤ語の文法—特に、使役関係の表現方法— に関する資料を集積した。成果は、論文[1,2,6,8,9]として発表した。

このうち[1,8]では、他動詞語根の使役形を使う、次の外形をした構文に注目した。

(i) X Y-ku Z Vt-aa.

(ii) X Y-dvaaraa Z Vt-aa.

記号-ku と -dvaara：格語尾、X：使役主、Y：被使役者、Z：対象物、Vt-aa：他動詞語根(Vt)の使役形(-aa)

[8]では、外形がそれぞれ(i)と(ii)であることで区別される２つの使役構文について、統語的相違を指摘した。[1]では、(ii)の外形を持つ構文には、二重他動詞と他動詞の使役構文という２構文があり、両者は統語的に区別できることを明らかにした。

上段落に述べた成果は、オリヤ語が３構文を合わせ持っているという（南アジアの諸言語の間で、また、類型的にも）特異な特徴のおかげで得られたものである。

(2) 日本語

研究代表者によるこれまでの研究で、岡山市方言を含む西日本諸方言にわたって、諸構文で補助動詞が「おる」から「おく」に置き換わっていくという、文法変化が進行中であることが分かっていた。研究期間内には、同変化の諸局面について様子を詳らかにし、生起理由の説明を試みた。成果は、論文[3,4,5,7,10,11,12]と研究発表[1,2,3,4]として発表した。

このうち、論文[11,12]では、西日本方言の補助動詞「おく／おる」の使い分けと、英語・スペイン語の直接法／接続法の使い分けの類似を指摘し、各言語の状況を意味的に説明した。[3,4,5,7]では、補助動詞「おく・おる」が関わる諸構文について、日本国内の地理的分布[3,7]や、岡山県における年齢的分布[4]を明らかにした。この結果などを基に、現在進行中の通時的変化の過程を描いた。同変化について理論的考察を行い、言語内的な側面と社会的な側面にわたってその誘因を数点推定した。言語内的には、同変化は、通言語的には主観性の度合いが増大する方向にあること、また、日本語内部では補助動詞「おく」「おる」には元来から使用頻度の偏りあったことが、いずれも、ある種の文の異分析を誘発するのに貢献したと考えた[5]。社会的には、こうして発生した新構文の文法内拡張・社会的拡散にあたって、それの特定事例が先導役を果たしたこと、そのような事例には社会的・言語的に“代表事例”と呼べるようにする特徴が備わっていること[7]を指摘した。

(3) 残された課題

調査開始以前に予期していた以上に、各言語の文法的個性それ自体が、理論的興味をそそったり新奇な現象を見せたりと調査者を魅了した。これに応じ、個々の言語独自の特徴の解明にエフォートをつぎ込むこととなり、各言語の多くの特定項目について詳細にわたる資料を集積した。

その一方で、資料がこれら言語の間で比較可能な体裁をなすまで整ったかという点では、多くの項目に関して対応する情報が欠けた形にとどまった。今後の調査で補完が望まれる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１２件）

[1] 山部順治「オリヤ語における、二重他動詞構文と、他動詞の使役構文」『日本言語学会第 138 回大会予稿集』、無、2009 年 6 月、6 頁.

[2] 山部順治「オリヤ語」梶茂樹・中島由美・林徹（編）『世界のことば情報小事典』大修館書店、無、2009 年、pp.98－101.

[3] 山部順治「新しい構文が使われだすとき―補助動詞『おく』の文「テレビで天気予報があり『よけ』ばいいな。」をめぐって―」『ノートルダム清心女子大学紀要日本語日本文学編』、無、33(1), 2009 年、pp.9－35.

[4] 山部順治「岡山方言における、文法体系の個人間変異と通時的変容に関する研究」『文化、芸術、教育活動に関する研究論叢』財団法人両備樫園記念財団、無、21, 2008 年、pp.19－46.

[5] 山部順治「西日本方言における、補助動詞「おく」の非意志的構文の成立と多様化」『ノートルダム清心女子大学紀要日本語日本文学編』、無、32(1), 2008 年、pp.左 1－32.

[6] 山部順治「オリヤ語」（［リレー連載］私のフィールドノートから【……発見とときめきのフィールド言語学……】第 14 回）『月刊言語』、無、2008 年、37:2, pp.98－103.

[7] 山部順治「補助動詞「おく」の非意志的用法の 3 構文―地理上の分布と文法体系内でのつながり―」『日本言語学会　第 135 回大会予稿集』 、無、2007 年、pp.292－297. 要旨 :『言語研究』133, pp.196-197.

[8] 山部順治「オリヤ語の、被使役者の格の相違で区別される 2 つの使役構文」『日本言語学会　第 134 回大会予稿集』、無、2007 年、pp.30－35. 要旨 :『言語研究』132, p.123.

[9] Junji Yamabe, 'Semantically explaining grammatical properties of two types of relative clauses in Oriya',*Nidaba*, Linguistic Society of West Japan, 無、2007 年、36, pp.27－36.

[10] 山部順治「補助動詞「おく」の諸用法の共時的つながりと通時的拡張経路　第 3 部―非情物主語―」『ノートルダム清心女子大学紀要日本語日本文学編』、無、2007 年、31(1), pp.左 15－42.

[11] 山部順治「西日本方言の補助動詞「おく」を英語・スペイン語の接続法と対照する（後半）」『ノートルダム清心女子大学紀要　外国語・外国文学編』、無、2007 年、31(1), pp.67－86.

[12] 山部順治「西日本方言の補助動詞「おく」を英語・スペイン語の接続法と対照する（前半）」『ノートルダム清心女子大学紀要　外国語・外国文学編』、無、2006 年、30(1), pp.101－117.

〔学会発表〕（計 4 件）

[1]　山部順治「九州北部方言にみられる、補助動詞『おく』の一用法　―「テレビで天気予報があり『よけ』ばいいな。」―」、九州方言研究会　第 26 回研究会、2008 年 7 月 5 日、別府大学

[2] 山部順治「文法変化の条件としての文脈と頻度 : 西日本方言における補助動詞「おく」構文の異分析の場合」西日本言語学会第 37 回講演・研究発表会、2007 年 9 月 15 日、九州産業大学

[3] 山部順治「岡山方言における補助動詞「おく」構文の通時的拡散と共時的かたより」第 312 回岡山国語談話会、2007 年 6 月 9 日、ノートルダム清心女子大学

[4] 山部順治 「西日本方言における補助動詞「おく」「おる」対立の類型論的性格」西日本言語学会第 35 回研究発表会、2005 年 9 月 3 日、ノートルダム清心女子大学

〔その他〕

山部順治　ホームページ

http://www.ndsu.ac.jp/8000_prof/8100_org/8120_yamabe/entrance/entrance-f.htm

６．研究組織

(1)研究代表者

山部　順治　(YAMABE JUNJI)

ノートルダム清心女子大学・文学部・准教授

研究者番号：00330598

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし